
海外研修制度の充実をめざして 一文書と動画による「手引き」の作成

研究代表者	金子	眞也	(法学部)
共同研究者	安藤	真次郎	(文学部)
	許	秀美	(文学部)
	安田	圭史	(経済学部)
	今井	敦	(経済学部)
	國重	裕	(経営学部)
	廣瀬	純	(経営学部)
	佐藤	和弘	(法学部)

1. はじめに

1989年に最初のコース生を迎えてから29年が経過し、「海外研修」の適用を申請する学生にも制度発足時とは変化が見てとれる。それは海外の大学で外国語以外の科目（講義科目）を受講し、単位を取得する学生の増加である。本プロジェクトは、ここ数年の海外研修制度申請者へのアンケート調査や聞き取り調査を通じて、「語学研修」「フィールドワーク」「演習の遠隔指導」「海外での講義科目受講」「海外研修と単位認定にかかわる手続き」の5つの面から問題点の洗い出しと改善点を探っていき、その成果を文書ならびに動画にまとめ、コース生の指導に役立てるのを目的として、本研究を企画した。

2. 事前の準備

2.1. 留学生帰国報告書の精査

国際関係コース「海外研修制度」に基づく「海外研修」と、「学生外国留学規程」に基づく「留学」とは別の概念である。両者のちがいのポイントは、「海外研修」は短期でも可能なのに対し、「留学」は最低でも学期単位となること、「海外研修」の中の「語学研修」は語学学校でも可能であるのに対し、「留学」の場合は研修先が原則として「大学」（大学付属の語学学校を含む）に限られることなどである。交換留学や私費留学に行くコース生がほぼ例外なく「海外研修制度」を利用していることに鑑みると、留学した学生の帰国報告書を閲覧することは、海外で学んだこと、とまどったことなど彼らの留學生活の実態を知る上で役に立つと考えられる。そこで、事前の準備作業として、本コース所属交換留学生を中心に、「帰国報告書」の精査を行った。

2.2. 他大学の状況調査

海外での語学研修はいずれの大学でも実施しているものと思われるので、海外フィールドワークについて、他大学ではどういう取り組みを行っているのか、その状況を Web 上からわかる範囲で調査した。短期間の調査で結果も限定されるが、本学国際関係コースのように学生が半年なり三か月なり、ある程度長期にわたってフィールドワークを行っている事例は、今回調査した範囲では見当たらなかった。

他大学でよく見かけるパターンは、期間が1週間から十日程度の「限定された期間」に、「協定校のアレンジのもと実施する」というパターンや、同じく「限定された期間」に「教員のアレンジのもとで実施する」というパターンであって、本学とは期間の長さや教員側の現地でのアレンジの有無が異なっていた。

本学国際関係コースでもっとも多いのは、1年間の交換留学期間のうち半年をフィールドワークにあて、その期間は留学先での学修のかたわらフィールドワークを実施するというもので、期間も長きにわたり、教員からの指導も基本的に遠隔指導となるところが、他大学と大きく異なっている。国際関係コースにおいては教員からの遠隔指導があるとはい

え、他大学と比して学生の自主性・自律性がより求められているといえよう。当初は同様の取り組みを行っている他大学との情報共有も考えていたが、他大学での実施状況との違いに鑑みて断念した。かくして他大学視察は実施を見送ることとなった。

3. 浮かび上がった問題点

3.1. 演習の継続的履修希望の有無の変化

国際関係コースが独自に設置した「特別演習」は、原則として留学中も継続的履修が可能だが、海外研修申請時に「(継続的)履修を希望する」に○をつけていた学生が、さまざまな事情から途中で方向を転換することがある。通常は履修辞退制度を適用して事なきを得るのだが、2018年度においては、「特別演習Ⅲ」のみを履修辞退する学生が発生した。「特別演習Ⅲ」とは卒業研究を指す科目名であり、「特別演習Ⅱ」と「特別演習Ⅲ」は継続履修一体科目(両科目を修得して8単位認定)であるのにもかかわらず、履修辞退自体は「特別演習Ⅲ」単体で申請できてしまうのが問題点として指摘される。今後は海外研修制度を利用して留学中に演習の継続的履修を希望する学生に対して、よりキメの細かい指導を行う必要があるだろう。具体的には「特別演習Ⅱ」と「特別演習Ⅲ」はセットで辞退させることで整合性をはからざるを得ないと考えられる。

3.2. 授業時間数の計算方法の問題

2017年度と2018年度について海外研修制度利用者の国際関係コース単位認定資料を精査しなおして気づいたことがある。それは、研修先が発行している成績証明書記載の授業時間数が実態を反映していない場合があることである。それがなぜ発覚したかという点、学生の持ち帰った時間割から積算していった時間数と証明書記載の時間数が合わない事由に直面したからであった。

大学によっては45分を1時間とみなすとの注記があることもあるが、何も注記がなければ、1時間=60分で計算することになるので、ズレが生じる。この問題を解消するには、帰国した学生に対し聞きとり調査や時間割の提出を求め、祝日の授業休講の有無も含め、一つ一つ計算していくほかなさそうである。

3.3. フィールドワークに関する問題点

フィールドワークに関する問題点とは、一言で言えば「現地での調査内容が薄い」ことである。文献調査が重要であることは論を待たないが、現地調査の伴わない研修は、フィールドワークとは言えない。「現地での調査内容が薄い」という問題を解決するため、フィールドワークを経験したコース生(卒業生を含む)対象に、よりよいフィールドワークを行うためにはどうしたらよいか、テーマ設定には何に留意すべきかなどの聞き取り調査を行った。

聞き取り結果をとりまとめると、「どの地域にも適用可能なアドバイスをするのは自分にはできない」「自分の関心のある地域・テーマを選ぶのがよい」「同じ地域でフィールドワークを行った先輩に相談するのがよい」などの回答が得られた。

4. 実際の作業について

4.1. 原稿の策定

国際関係コース海外研修制度に関する資料を精査し、コース生が誤解しそうな部分や実際に問題が顕在化した部分に留意しつつ説明の文章化を行った。本コース生で交換留学中に本制度を利用して語学研修やフィールドワークを実施したSさんにこの文章を提示し、学生目線で文章の組み替えを行ってもらった。細かいところで誤解が生じないように、教員とSさんとの間で一つ一つ解釈の摺り合わせをおこない、原稿が完成した。原稿はナレーションの部分と文字情報で示す部分にわけた。

動画編集にはアドビ社のAdobePremierProCC2018を使用した。実際の操作は同ソフトの使用経験のあるSさんをお願いした。当初は国際関係コースコモンルームにある端末を用いて作業を行っていたが、メモリーが2ギガしかない劣悪な環境に対する警戒を怠

ったため、パソコンが固まりデータが飛ぶという事態を招き、作業の進行に支障が出た。それ以前にSさんの憔悴が気の毒だった。こまめにデータを保存するようあらかじめ注意喚起しておくべきだったことが悔やまれる。なお、同じ事態を防ぐため、途中から他の部屋のパソコン利用に切り替えた。

ナレーションの録音には Windows PC と Sony の単一指向性マイク ECM-PCV80U を使用した。使える部屋が完全防音でないことに配慮し、単一指向性マイクを使用した。雑音を拾うことなくクリアな音声を吹き込むことができた。

WindowsPC で AdobePremierProCC2018 を起動させ作成中の動画に音声を流し込んだが、音声のモニタリングに難があり、結局編集作業は途中から Mac を使用することとなった。AdobePremier のバージョンは同一であるものの、慣れない OS のため少々手こずった感があることは否めない。

5. おわりに

こうして 9 分 20 秒の動画が完成した。当初は紙の手引きも作成する予定だったが、本コースのウェブサイトにて文字情報による注意事項は既に提示されていること、実際にコース生にアピールするのは動画であるという理由から、動画のみの作成とした。なお、動画作成の元原稿が残っていることから紙の資料も簡単に作成可能である。

本動画の特徴として、コース生が直面する可能性のあるさまざまな問題を取りあげ、解決法を示したことがあげられる。一般的な説明からは漏れてしまいがちなポイントを本動画で提示できたのは、Sさん本人が海外研修の経験者であり問題点を把握していたからと、いっていいだろう。

本動画は国際関係コースのオリジナルサイトで公開中であり、現在海外研修中のコース生にも有益な情報を発信している。この動画がコース生の海外研修制度利用の手引きとして有効活用されることを願ってやまない。

以 上

【参考】

国際関係コースオリジナルサイト：<http://www.ir.ryukoku.ac.jp/>